



ミナ ペルホネン The future from the past 未来は過去から

2010.1.16 sat.-5.30 sun.  
金沢21世紀美術館 デザインギャラリー

**Exhibition Document**

minä perhonen  
ミナ ペルホネン

The future from the past.  
未来は過去から

ミナ ペルホネン The future from the past 未来は過去から  
**2010.1.16 sat. - 5.30 sun.** 金沢21世紀美術館 デザインギャラリー

月曜日休館(5月3日は開場) 10:00-18:00(金・土曜日 ~20:00)  
主催: 金沢21世紀美術館 [(財)金沢芸術創造財団]  
協力: 袴田京太郎、イイノナホ



## Exhibition Document

展示記録図..... P.3

### 関連プログラム記録

- 図 皆川 明 講演会「描かれないデザイン」図..... P.5
- 図 ミナ ペルホネン ~大人のワークショップ「ざわ ざわ かな、かなざわ」図案を描こう! 図..... P.9
- 図 ミナ ペルホネン ~こどものワークショップ 図..... P.13





2010.1.16 sat - 5.30 sun

主催：金沢21世紀美術館 (財) 金沢芸術創造センター / 協力：神田源次郎、イイノナオ  
Organized by 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa Directorate of Promotion and Development Planning  
Cooperated by Myriam Heikkinen, Helsinki, Finland

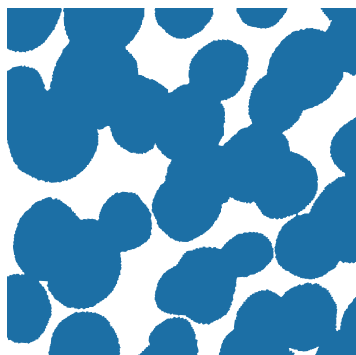




ガラスの壁を覆うのは、「ミナ ペルホネン」のテキスタイル「soda water」を拡大したモチーフ。その隙間からは2点のドレスが見え隠れします。そんな仕掛けから始まる「ミナ ペルホネン」の展示は、同ブランドのテキスタイルに織り込まれた物語のように、見る人の想像力を刺激し、出会いの高揚感をかき立てます。

展示された2点のドレスは、「未来は過去から」というブランドの理念を物語ります。宙に浮かぶドレスがわずか一枚の型紙でできているのに対し、もう一方のドレスを構成しているのは、様々な表情をもつ小さな布の集積。現在数百種類を数えるオリジナル生地は、豊かなアーカイブとなって新たなフォルムへと展開しています。素材の蓄積と、形への飽くなき探求が、織物の縦糸と横糸のように交差して、「ミナ ペルホネン」のクリエイションを紡いでいます。

ファストファッション隆盛の現在、時の経過によって色褪せることのない服づくりを目指すミナペルホネンの信念が、デザインにしなやかな強さを与えています。



## 皆川 明 講演会 「描かれないデザイン」

2010.4.10 sat. 14:00~15:30 会場:金沢21世紀美術館 シアター21 講師:皆川 明 (ミナ ペルホネン チーフデザイナー)

「ミナ ペルホネン」のデザイナー 皆川明氏が、人の内側から生まれるデザインのこと、デザインの背景にあるものを語りました。

*mina perhonen*  
The future from the past.  
皆川明氏

「未来は過去から」というタイトルで、今回は2つのボディだけで展示をしています。オレンジ色のドレスは、シンプルでモチーフのないデザインですから、「ミナ」をご存知の方はちょっと不思議に思ったかと思いますが、よく見ていただくと、一枚の布だけでつくられています。皆さんのイメージの中では、「ミナ ペルホネン」は、モチーフがあったり柄が描かれている印象があると思うのですが、素材を作っていくなかで無地のものもあります。それは、フォームをいかに自分たちの考え方で掘り進めていくかということ、柄を描くのと同じように常に研究しているからで、それもまた今「ミナ ペルホネン」ができる形への考え方です。もうひとつは、今までずっとつくられてきた素材をかけらのようにつなぎあわせてドレスを作っています。それは今までの「ミナ ペルホネン」の集積を表しています。1人で洋服を縫い始めてから、ちょうど今年で15年たちますが、現在は40名くらいのスタッフでやっています。でも1人で始めるときから、まずは100年続けたいと考えていました。現在15年ですから、まだまだ始まったばかりですが、自分や他のクリエイターたちが一緒に「ミナ ペルホネン」を作っていき、後には自分の人生を超えた時間の中で新しいクリエイションが生まれていくということを想像しながら現在を作っています。

前に置いてある洋服たちは、2010年秋冬のコレクションです。真ん中は美術館に展示しているドレスと同じ素材でつくられたコートです。今日は「ミナ ペルホネン」を初めてご覧になった方も多いと思いますので、今お店で発表されている春夏コレクション——ファッションは春夏と秋冬で2回発表しています——の映像を見ていただこうと思います。これは「ミナ」のスタッフで演出方法や撮り方を考えて撮ったものです。クリエイションというものが自分たちから離れずに、自分たちの中でやることは全てやっていきたいという思いから、こうした映像も自分たちで考えています。

映像は「夜明け前に」というテーマで作りました。自分は洋服のモチーフを

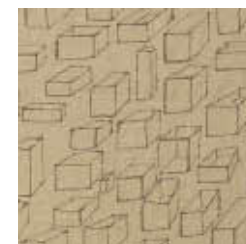


描いたりデザインをするときに、今感じている自分の心持ちや、社会の中にどんな気分があるのかを感じながらデザインに置き換えていきます。この春夏コレクションは、1年くらい前に図案を描いていたのですが、社会的には経済的な面などでネガティブな空気が感じられるなど思っていた頃で、そして暗いということが本当にただただマイナスなのかなと思っていた時期で…。夜が明ける前の暗い静かな時間というものはなんか気持ちがいいものだなあと、夜明けがくる、だんだん光がさして輪郭が見え始めるということにとっても希望を感じたりするので、今の社会的な空気というのはそういうことなのかなということで、

「夜明け前に」というテーマを決めました。いつもだいたい一つの文章が頭に浮かんで来て、それをもとに図案を描きはじめます。今の映像の最後に、モデルの子が針金でつくられた箱を持って登場していました。これ(a)は空箱のモチーフを刺繍で図案化したものですが、空の箱というのは2つの気持ちにさせます。何にも入っていないという気持ちにさせたり、何でも入れられるという気持ちにさせたり。どちらに自分の気持ちを置くかで可能性が見えたり、見えなかったりして、自分自身がどう見るかによって一つのものが変わって見えるということを感じたシーズンでもあって、それで空箱のモチーフを描いたりしたのです。

今日のテーマは「描かれないデザイン」ですが、いわゆる絵として見えている部分と描こうするときの気持ち——その気持ちってというのははっきりと具体的に描かれていないことも多いので——そういうものをとても大事に感じていて、それをテーマにできたらと思いました。箱の絵が刺繍されているということも、その出発点は、自分の立ち位置で物の見え方が変わるということを表現したかったわけですし、その気持ちを描くときに、箱の形を借りて描いているということなんです。

自分は15年前に「ミナ ペルホネン」——もともとは「ミナ」というブランドで、フィンランド語で「自分」という意味です。「ペルホネン」というのは「ちょうちょ」という意味です——を、布からデザインしてみたいと思って始めたわ



cube (a)

けですが、テキスタイルの勉強をした経験がなくて、自分がデザインしたものを工場で作りながら教わってというのが始まりでした。今日このあと、テキスタイルの図案を描くというワークショップがあるんですが、自分も始めた頃はただ絵を描いてそれを生地していたので、今日一緒にワークショップをやらせてもらう(スタッフの)田中景子に布の図案の描き方を教わったりもしました。いつもまず自分のやりたいことがあって、方法論が分からないけれど、それをやりたいということから方法論を探ることがとても多くて。でもそうすると不可能という思いがないので、時間をかけていくと形が見えてくることがあります。ファッションは「流行」という言葉を使うことが多いですが、例えば花柄が流行しているとかモチーフの具体的な言葉を使いますが、大切なはその花のたたずまいで、どんなふうに咲いていてどんなふうに見えるのかというのが、デザインする上ではとても大事です。花柄というのはこの空箱と同じで、表面的に見えている視覚的なデザインであって、デザイナーの出発点というのはそれをどう感じているから具体的な形を借りて描いてみようということ、つまり自分の心の中にある気持ちをどうやって想像力を載せて視覚的にするかだと思っています。僕らのデザインの仕事のなかでは、視覚的なデザイン、フォルムが発点になることはあまりないのです。出発点はあくまでも思いとか気持ちであって、実際にはなくても想像力の世界では表現できる絵とか形というものを、デザインという行為の中でどう進めていくかというのが仕事なので、「描かれないデザイン」というのは、どういう気持ちで描いていたかということを指しています。

「未来は過去から」ということで、過去のテキスタイルをお見せしたいと思います。今は、いろいろなテクニックを使い、日本中にある産地と、ヨーロッパの産地で様々なテキスタイルを作っていますが、はじめは一つ二つの工場で作る方を教わりながら生地を作っていました。僕らは一つのことをやると一つの方法を知り、また次のことをやると新方法を知りと、仕事を通して少しずついろんなことを知っていくなかで、仕事どうしの結びつきから新しい可能性が見えてきて、今では自分たちでもいろんな方法を考えたり、工場の人と新しいテクニックを作ったりしています。そういう意味では、「未来は過去から」というように、過去からの積み重ねによって新しい未来のものがつくられるということを感じています。毎日やっていることはあまり変わらず、日々のデザインをしているので、木に譬えると、年輪の成長する幅は同じでも、年を追うごとに木の幹が太くなっていくというイメージで、同じことを繰り返しているようでも、いろんなことが結びついてたくさんの可能性が生まれるということを実感しています。今ヨーロッパで一緒に仕事をしている生地屋さんは、百何十年、二百何十年という会社がとても多くて、そのアーカイブを見ると、今までの洋服や生地の歴史の本を見るようでとても楽しいのですが、僕らもこのように時間を積み重ねたいと、歴史のある工場に行くといつもそう思います。自分が始めたことが自分の時間のなかで終わるというよりはリレーして積み重なる、次の人が積み重ねるといような続き方をしたいなと思っていて、今、自分たちは未来のために積み上げているような感じです。

少しテキスタイルのご案内をしたいと思います。

これ(b)は、自分が15年前に初めてつくったテキスタイルで、《hoshi'hana》という名前がついています。今年の春夏のコレクションでも使っています。デザインは常にパーマメントで使いたいと思っていて、作る時も、自分たち

がずっと使い続けられるほど満足のいく仕事であったかとか、そのデザインは

ずっと人に喜ばれる力があるかどうか、基準となっています。これは最初にデザインしたもので、あまり知識なく始めたものですが、刺繍というのは一般的にはもう少し規則正しく刺繍されているものが多かったのですが、自分はそういうことを見てこなかったで、手描きで自由に描いたものを工場に持って行って、「これを手で描いたように刺繍したいんです」というお話をして…。今ではそれが「ミナペルホネン」の刺繍の特徴にもなっていますが。機械で刺繍しても人のように、ということ自分たちは大切にしています。これは、不揃いな花びらのような雪が舞っているというイメージだったり、星のようなイメージだったり、星のような雪のような花のようなという、何か舞い散るイメージを表現したかった柄なんです。15年前のデザインですが、次の春夏でもそういう表現をしたいなと思ったのです。今、数百種類の図柄がありますけれども、いつも、また作りたいと思わせる柄であるようにと思ってやっています。

これは展示室のガラスに貼られている《soda water》という柄ですが、人の想像力をもって、丸の集合体だということを見せたい柄でした。ほとんどの丸がくっつきあって、丸として独立しないように描かれながら、でも人の目は丸を感じていくという…。最初は「not dot」(ドットではない)という名前前で描き始めていたのですが、できあがったときに炭酸水の泡のような表情があるなと思って、「ソーダウォーター」とつけています。

これ(c)も新しい春夏の柄なんですけれども、鳥男のようなこの人は、ここ(テキスタイル)に書かれている「未来」という文字を見えています。人と環境が接点をもっていくことが未来につながっていくといいなというテーマで、いろいろな木や人や鳥といったモチーフが、スケッチブックにドローイングしているようなタッチで描かれたものなので、この鳥などは途中で終わっているような感じだったり、そんな描きかけのような絵のタッチでできています。自分は、不完全という状態が生命力を感じるので、強い感情をもって絵を描くのですが、その絵が見た時に完全でないようにしたいと思っています。完全でないように意図的に描くということではなくて、感情を強く載せていくと、絵の構図やタッチは感情にまかせてブレがあるんですけど、そのブレは、きれいに下書きしたものをなぞるような線よりも生命力を感じられて、また、不完全という余白がcausing想像力のスペースになることがあると思って、結構描きかけだったり思いにまかせて描いたタッチがよく表現されています。

このテキスタイルでは、鳥が枝をつまんで飛んでいます。テキスタイルの中に1羽だけ。そして、お客様が洋服を着ているうちにいつか、ここから採ったということが分かります。僕はこの鳥が枝をついばんであそこまで飛んでいるという時間を描きたかったのです。また、ファッションが「流行」という言葉とともに、とても短いサイクルで移り変わっていく様子を見て、もっと着ているうちに気づいたり、気づいた時により愛着がわいたりする服を作ってみたいなと思ってデザインしています。



hoshi'hana (b)



wander (c)



forest gate (d)

sleeping rose (e)

sleeping rose (f)

これ(d)は《forest gate》といって、木の部分は少し霧がかかっている、緋の技法で織られています。そこに動物が描かれていますが、その線はクリアです。緋というのは、本来縦糸と横糸の織りのズレで柄がかすれていくのですが、それだけでは今できる表現としては足りないと思い、予め緋の柄の中にスペースをつくっておいて、緋の生地が出来上がった後に動物のクリアな線をプリントしています。僕は実際の動物を描くことがあまりないので、これが熊に見えたり何か別のものに見えたり、その方の想像にまかせていますが、この赤い動物が冬の森に入っていくときに色を発光させるというか、発光させて森に入っていく。せっかく、寒い冬に森に集まるなら、色が明るく華やかになった方が冬の森としては楽しいのではないかと考えて描いた柄でした。

これは、袋の中にちょうちょが隠れている生地で、もともとの洋服は無地のネイビーやグレーの生地で作られてお店に並んでいます。そして、まるで袋状になった部分をお客様が切ると、中から蝶が出てくるというテキスタイルです。僕は基本的に手織りではなく、機械で生地を作りますが、人と機械との接点みたいなことが興味深くて、工業製品として作る中に、人の感情とか人の手のタッチとかが残せると考えています。これも機械で織っていくので繰り返しがあがるのですが、お客様が好きなのところを切って、ちょうちょが出てくるという行為によって、パーソナルな服になるということをやってみました。規則正しくできていく工業製品にどうやってパーソナルな世界観を出せるだろうかということへの一つのトライアルでした。シーズンごとに一つずつ丸をカットしてもいいですし、全く無地で着ていて、ある日全部の蝶を開かせてあげようと思ってもいいです。着る人の考えによって洋服が変わっていくということから、自分たちが既製服というなかでものづくりをしていてもパーソナルな感覚を表現できるということを知りました。

前にあるのは、展示会の後、オーダーに基づいて作られていく洋服です。向かって右側の服の生地は、リパティというイギリスのテキスタイル会社の依頼で描いた図案(e.背景)がもともになっています。それは、世界中で発売されていくものなので、ミナ ペルホネンの図案というよりは、リパティの図案として出ていきます。《sleeping rose》という名前、薔薇が寄り添って寝ています。どちらにも花がついていて、図案として上下左右がないように描いています。この柄が世界中に出ていくなかで、自分で描いたリパティ社の柄をミナ ペルホネンでも表現したいなと

思って、この生地(f)では、ちょっとだけその柄が見えるように、線を上からもう一度プリントして、リパティの柄を隠してしまっています。でも、隠すということは、より見えるということでもありまして、見たいという気持ちのもとになるというか、なにか木漏れ日が射してそこに花があるような柄に表現しているのです。

隣は展示にも使われているものですが、色も柄と同じく感情を表現するので、このフレッシュな少しオレンジがかかった赤が、気持ちの高揚があっという色だなと思いました。タスマニアに住んでいる羊の毛を使った、メルトンという、ウールを織ったあとに縮絨して作る素材で作られたコートです。

隣のはベルベットのジャガードで、蝶の群れのようなイメージで描いています。これは、ベルベットのパイルの光沢感とマットなウールの質感、その色の対比や素材の立体感みたいなことを表現しています。

リパティはイギリスですし、タスマニアのウールを使ったものは日本で織っていますし、隣のは和歌山県で織っています。世界中から素材を集め、世界中で得意とする織りをもっているところに行き、そこでしかできないような織物をお願いして、洋服にしています。

この秋冬は、「華やかな影、静寂の光」がテーマでした。自分の中で、影はいつも後ろに控えていて、光は華やかで表に出ているようなイメージがあったのですが、冬は太陽の光が夏よりやわらかい印象で、その光がつくる影は詩的な華やかさがあると感じていたので、影が主役の、華やかさをもった影ということを決めてやってみようと思ったのです。このように、一見矛盾しているようなことにピンとくるのがよくあります。自分の中の既存概念や先入観がもっている言葉や映像のイメージが、裏側にある本質的なものを見失わせていると時々感じるのですが、そういう意味で「華やかな影」と「静寂の光」という言葉が冬の景色の中で浮かんだ時に、それは自分が今までもっていたイメージと逆だけれども、今の社会的な部分でもつながる感覚だなと。ネガティブだと思っていたことが、それをずっと感じていくうちに実は大事なものだということに気づける時代なんじゃないかな、とその時思ったのです。

僕は仕事を通して、例えば生地屋さんか、今ものづくりがうまくできない環境だったり、工場もなくなっていたり、作る環境として危惧する状況であると実感しています。それは、いろんな製造業の中で言えることかもしれませんが、洋服はいつも人の心を喜ばせるファッションですが、それを一つの産業と見た時にはとても憂いのある状況なのです。でもそれをファッションに関わる多くの人が気づいた時に、それではいけないという気持ちが強く力になって、もう一度ものづくりを一生懸命やろうという気持ちが高まったりして、よくない環境を変えるには強い意識がないとダメなんだということを感じたときに、変わる力になるというか。ただ、その力は、結構大きくないと変わらないと思うのですが。

ファッションも、とにかく安い場所で早く作ればいいのか、時間やコストのベクトルに価値を置きすぎている時代が長かったのですが、やはり人が着るということは、心が高揚したりとか、そのものに愛着をもつとか、そういう気持ちが洋服にはとても大事なんだというなかで、物質を作る都合だけでは魅力がないということにみんなが気づき始めて、またファッションが人の心に作用するものになっていくんじゃないかなと思っています。そんなことを世界中や国内のいろいろな産地でものを作っていると日々感じています。この秋冬のものを3体並べただけでも、作る場所も全然違いますし、原料もいろいろなところで作っています。タスマニアのウールっていうのは、とて



memories of rain (g)

unforgettable moment (h)

も柔らかくて滑らかなんですね。水がとてみいので、羊たちの毛並みがとても柔らかいそうです。そういうものをいるんなところで見つけたり教えてもらうことで物ができていくということはとてもやりがいがあると思います。

せっかくなのでリバティの他の柄も。日本人のデザイナーが描いたのは今年が初めてで、自分以外にも2名の素晴らしいデザイナーの方々が描いていますが、自分は3柄描かせてもらいました。

これ(g背景)は、滲んじゃってるんです。滲ませたんですけど、リバティには社内に図案を描く人もいますので、それを敢えて外のデザイナーに頼むということを、自分がどう受け止めるべきかと考えました。デザインって大概、社内には厳しいんですね。外の人のは受け入れやすいことはありますが、そこで、少しタブーがあったら面白いんじゃないかなと。もともと滲んじゃってるとか。もし滲んでない柄を描いて、工場が滲ませたりすると不良品になるんです。そういう意味では滲んだ柄ってプリントとして出づらいです。だから、もともと滲んじゃったプリント柄を描いて、子どもの服を作ったりしたら、子どもも心置きなくいろいろ垂らせるんじゃないかなと思ったり、あとは撥水の加工をかけて、濡れるとはじくだけど滲んじゃってみたい、なんかそんなジョークも混ざりながらの絵なんです。そんなことをいるんなモチーフで、しかも子どもが布にいたずら描きしたかのように、描いてあります。

この図柄(h)はリバティへの敬意というか、リバティらしいことを自分もやってみようというものなんです。リバティ社は百何十年プリントをしてきているので、そのポテンシャルを知りたいなと思って、どこまで細くプリントできるかということに興味もって、細いペンで——似ているようでほとんど違う花です——それを全部描いたのですが、とても細かい表情まで表現されていて、さすがだなと思いました。部分的に花が描かれていないのは、最初鉛筆でもやもやとしたところをランダムに画用紙一面に描きまして、今度は花のシルエットを消しゴムで消したものです。リバティは花柄がまず浮かぶ会社なので、花を描かない花柄をやってみたくてと思い、消すという作業で花を表現してみようと描いた図案です。消しただけだと最終的に寂しかったので、ところどころ筆を入れていますが、花を消すということで花を描くということも、既成概念とか先入観、つまりリバティで自分がイメージすること＝花柄みたいなことに対して、違う角度でしかもリバティであるということはどうやって成立させるかということ

への一つの答えでした。

そんなふうに、表に見えていない裏側の視点に気づいていけたらいいなと思いながら図案を描くことが多いです。そうすることで、自分たちの考えが出发点にあってそれが徐々に形になっていくという表現が自分たちのやり方で、自分たちのテキスタイルがもっているストーリーであって、その洋服を着たいと思う方も、実はこの内側に流れているストーリーとか表現に共感しているんじゃないかなと思ひまして。自分も描く時にどこまで気持ちを含められるか、表に出てくる線がその感情を載せているかというようなことを常に計りながら、あまり下書きというものをしないで描きます。下書きをすると線を追いかけてしまうというか、気持ちよりも方法が先に立ってしまうので、感情を載せていくためには、下書きをほとんどしないで頭の中でイメージして描こうとするものを画用紙の中に思い浮かべて、一気に描くことが自分たちのアトリエではとても多いと思います。自分はそもそもコンピューターでイラストを描くということができないので、手描きだったり切り絵だったり、道具を使って実際に図案を描いていくのですが、それは、やり直しがきかなかったり、偶然を含んでくれたり、自分の意識とその時の偶然が合わさって、とても生き生きとした表情を作ってくれるので、アトリエで図案を描く時にはとても大きな生地幅ほどの絵を結構描いています。そうすることで、その時しかできなかったり、その作業に自分自身が没頭しているということが、結局は形になった時に人に伝わる力になるんだろうなと、そこはうまく説明ができないんですけど、確かにそうだなと感じることがあります。描く時に、または洋服のカッティングをする時にどこまで感情が載っているか、載っていないならやらないみたいな、そんな技法というよりは感情のパロメーターをととても大事にして図案を描くことが多いです。

今日、桜が満開で、まだ散らない桜を見ていると、何か僕は散るのをこらえている桜のように見えて、それが何かとても変な感じ方なのかなと思ひながらも、止まっているものも動かそうとするエネルギーを感じました。何か、全員で「もうちょっと我慢しろよ」みたいな、明日は誰かしら、「お先」みたいな感じで散り始めると、つられて「自分も」みたいな散り方をして落ちていくんだろうけれど、そうしていくうちに今度はみんなが意外と散り方を面白そうとか楽しそうみたいなことを考えたりしてるのかなと思ひたり。

そうやって物を見て想像するということが、いろんな情報が自由に手に入る現代の中でとても大事なことだなと思ひました。情報はもちろん便利だったり、時間を短縮したりってことになるんでしょけれども、本来生きているってこういうことの楽しさっていうのは、僕は想像力にあると思ひています。情報が自分の頭の中を満ち過ぎないように、想像力が小さな情報から広がっていくことの方が生活としては大事なんじゃないかなと思ひているので、そういうことを感じてもらえるような洋服やデザインをこれからもしていきたいなと思ひています。

たった15年しか過ぎていない状況ではあるんですけど、これから後につなげていく自分たちのクリエイションを見て、というか想像して、今のものづくりをこれからも頑張っていきたいなと思ひますので、ご興味のある方は時々見ていただいて、洋服の中に想像力が働くことがあればいいなと。洋服は機能も大事なんですけれども、人が身に着ける上でやはり気持ちの高揚のスイッチも持っているということはとても大事なことだと思ひますので、そういうファッションを楽しんでいただくとまた楽しいかなと思ひます。どうもありがとうございました。



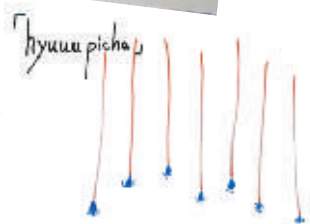




アイデアスケッチから図案へ



皆川さんの  
様々なアイデアが  
参加者の発想を広げます

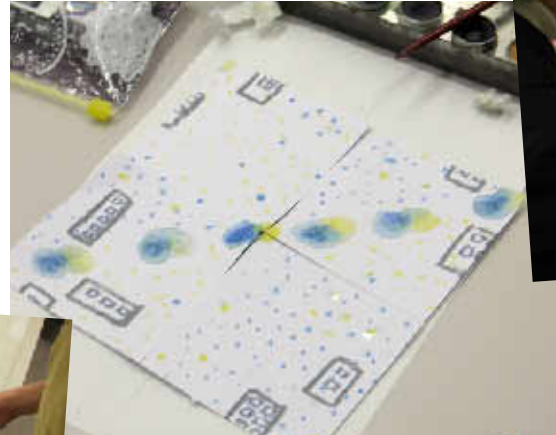


思い思いの素材で絵を描きます





絵をコピーして連続した図案を作ります



並べ替えてバランスを考えます





発表と講評



# ミナ ペルホネン ～子どものワークショップ

2010.4.11 sun. 14:00~17:00 会場:金沢21世紀美術館 キッズスタジオ  
講師:皆川 明(ミナペルホネン チーフデザイナー)

*minä perhonen*  
The future from the past.  
未来は過去から



「ミナペルホネン」の洋服に使われている様々な表情の生地は、様々な物語をもっています。  
今回のワークショップで「ミナペルホネン」からプレゼントされたのは、アイロンプリント用に加工されたオリジナルの布やボタン。子どもたちは、生地の色や柄からそれぞれに物語をふくらませ、思い思いの形、組み合わせを楽しみながら、無地のバッグに自分自身の世界をつくりました。



今日の活動について、皆川さんからお話を聞きます



「ミナペルホネン」のオリジナル生地裏に接着剤がついています





生地を選びます



アイデアスケッチ



皆川さんがアドバイス



配置を考えます



家から持ってきた  
お気に入りのリボンやボタンも使います





真剣な表情の子どもたち



アイロンでバッグに生地を  
貼りつけます



はじめてのアイロンがけやボタンつけを  
スタッフがお手伝いします





完成したバッグのお披露目です





## ミナ ペルホネン The future from the past 未来は過去から

### 【展覧会】

ミナ ペルホネン

金沢21世紀美術館 ☒ キュレーション: 立松由美子、平林恵

☒ 教育普及: 平林恵、木村健

stompdesign ☒ 広報デザイン: 南知子

### 【記録集】

講演録: 皆川明 / ミナ ペルホネン

執筆・編集: 平林恵

デザイン: 南知子 / stompdesign

協力: ミナ ペルホネン

© 2011 minä perhonen

© 2011 21st Century Museum of Contemporary Art, Kanazawa